

# 国鉄紀勢本線々増工事関連 埋蔵文化財発掘調査概報

南部高等学校々庭遺跡隣接地  
西の地遺跡

1976

和歌山県教育委員会  
社団 法人 和歌山県文化財研究会

## 序

このたび国鉄紀勢本線増工事が実施されるにあたり、日高郡南部町南部高等学校々庭遺跡隣接地及び同郡印南町切目の西の地遺跡の2ヶ所を国鉄大阪工事局と和歌山県教育委員会が協議のすえ発掘調査を実施することになり、社団法人和歌山県文化財研究会が受託のうえ行いました。

この調査によりまして、主として中世の遺構および古代から中近世にかけたの遺物が確認され、この地方にとって貴重な資料を得ることができました。ここに発掘調査の成果の概要を報告し、一般の活用に資したいと存じます。

最後に発掘調査にあたり、ご援助とご協力を賜わりました関係各方面の方々に深く感謝の意を表し、厚くお礼を申しあげます。

昭和51年3月

社団法人和歌山県文化財研究会

会長 和 中 金 助

## 例　　言

1. この概報は、国鉄紀勢本線線増工事に関する埋蔵文化財発掘調査の概報である。
2. 発掘調査は、昭和48年度から50年度まで南部町南部高等学校々庭遺跡隣接地・印南町西の地遺跡の2ヶ所について行った。
3. この概報中、図版第五・六及び十二・三の遺物番号は共通である。
4. この概報の執筆及び編集は永光寛が行った。
5. この調査にあたって地元関係各位に種々のご協力・ご教示を賜わり、ここに感謝の意を表します。

## 調　　査　組　織

調　　査　委　員	馬　磨　正　信	(和歌山県文化財保護審議会委員)
	巽　　三　郎	(　　　　タ　　)
	藤　沢　一　夫	(　　　　タ　　)
	山　本　武　夫	(日高郡南部町教育長)
	新　谷　松五郎	(日高郡印南町教育長)
事　務　局　長	前　田　敏　郎	(県教育委員会文化財課長)
タ　次　長	海　野　正　幸	(　タ　主幹)
タ　幹　事	伊　達　恵　一	(県教育委員会文化財課第2係長)
調　　査　員	永　光　寛	(県教育委員会文化財課技師)
協　　力　員	上　田　秀　夫	
	山　本　高　照	

## 目 次

### 序

### 例 言

I. 調査に至るまで .....	1
II. 南部高校隣接地 .....	1
III. 西の地遺跡 .....	2

### 出土遺物観察表

1. 須恵器 .....	4
2. 土師質土器 .....	5
3. 陶器 .....	6
4. 磁器 .....	7
5. 土師質土器 .....	7

### 図版・挿図目次

図版 1 位置図 .....	8
△ 2 南部高校々庭隣接地調査地区 .....	9
△ 3 西の地遺跡調査地区 .....	10
△ 4 西の地D地区遺構図 .....	11
△ 5 西の地D地区遺物実測図 .....	12
△ 6 .....	13
△ 7 遺跡遠景・トレンチ .....	14
△ 8 トレンチ断面・トレンチ .....	15
△ 9 トレンチ断面・西の地遺跡遠景 .....	16
△ 10 西の地C・D地区 .....	17
△ 11 D地区 .....	18
△ 12 D地区・遺物 .....	19
△ 13 遺物 .....	20

## I 調査に至るまで

国鉄大阪工事局は、和歌山県北部および伊勢湾臨海工業地帯の造成の進捗と相まって、客貨輸送量は今後急激に増加することを予想し、紀勢本線の複線化を計画。すでに和歌山～道成寺間は、工事を終え目下、道成寺～紀伊田辺間の工事に着手しているところである。和歌山県教育委員会は、この工事にあたって、すでに周知の遺跡として知られている、南部高校々庭遺跡の隣接地に工事が実施されることをキャッチし、その工事等の具体的な計画を知るべく大阪工事局と協議を行った。それに伴い県教委は、道成寺～紀伊田辺間の工事予定地の詳細分布調査を行い、さらに一ヵ所の遺物散布地を発見、再度協議を行ったすえ、「南部高校々庭遺跡」（南部町）および「西の地遺跡」（印南町）2カ所の遺跡確認調査を実施することになった。予備調査は、用地買収等の事情により3カ年度にまたがり、南部高校々庭遺跡隣接地（昭和48・49年度）西の地遺跡（昭和49・50年度）を実施した。なお、西の地遺跡にあっては、D地区に遺構（溝状遺構およびピット）を検出したので同地区のみ用地内全面発掘調査を行った。

## II 南部高校隣接地

### 1. 位置と環境（図第一参照）

県立南部高等学校グラウンド及校庭より、かって弥生土器（弥生時代中期後半の壺等）が3地点にわたって出土しており、これらの遺物出土地に共通することは、すべて遺物包含層を認めず砂地より単独に出土することである。もともと、この高校を含めた旧南部町内は、紀伊水道に臨み、南部川々口に転開する砂丘（北西～南東方向にのびる）上に立地し、みなべ王子社を中心に拓けてきた土地であるが、この砂丘上に、前記南部高校々庭遺跡と同様に遺物の出土する地点が他に3カ所確認されている。時代は、弥生中期と古墳時代初頭のものであるが、やはり包含層をともなわず単独出土である。

### 2. 調 査

調査地点は、砂丘上の後背湿地で南部高校々庭遺跡よりは東隣接地にあたるところで、10数年前に沼田であったところを埋たて現在畠地にしている。調査対象面積は約2,700m<sup>2</sup>で昭和48年度に約1,700m<sup>2</sup>、49年度に残り約1,000m<sup>2</sup>について予備調査を行った。

調査は、砂丘の後背湿地にあたるところであり、弥生時代の水田地が存在するのではないか、あるいは南部高校校庭遺跡の何らかの関連がつかめるのではないかという、その二点に問題をしづり、トレーナによる発掘調査を行った。調査はまず10数年前の埋土をはがし、巾2m長さ83m・10m・9mのトレーナを設定し発掘を行った。埋土は、深さが2mもあり、それをはがすと旧水田面があ

らわれたがこの付近の小字名が「池田」と称する通り、まさしく池田で、耕作土（床土も含む）をはずすと弥生時代から中世にわたる遺物が少量ながらふくまれている淡紫褐色シルト層があらわれる。このシルト層は、約50cmほどの堆積であるが下方にゆくにしたがって黒褐色に変色する。この層の下層は青灰色砂で遺物は全く含まれていない（海拔約4.3m）。おそらくこの砂層は、南高遺跡等が立地する海岸砂丘（海拔6～7m）へと連なるものであろう。つまり、砂丘の後背地にシルトが堆積その段階で周辺遺跡からの遺物が流入したものと考えられる。

### 3. まとめ

このように、南部高校庭遺跡との関連性および水田址という点に目的をしぼり発掘調査を行ったが、先に記したように旧水田の下に堆積するシルト層に、若干の遺物（弥生土器片・土師片・須恵器片・瓦器片）を見出したことにとどまり明確な遺構を確認することはできなかった。しかし、シルト層に念まれた少数の遺物を考慮すると、周辺の砂丘上から流れ込んだ可能性が大きく考えられ、しかも南高校庭遺跡は、単に南部高校内にとどまらずもう少し埴田方面にも広がりあるのではないかろうか。ということが考えられる。しかし、今回はそれらを明確にしえなかつた。今後この周辺地域特に砂丘上において種々の開発行為が行なわれるであろうが、それに先立ち周辺遺跡の発掘調査が行なわれるよう期待したい。

## III 西の地遺跡

### 1. 位置と環境（図第一参照）

本遺跡は、紀伊水道を望む丘陵地帯に所在し、眼下には切目川・切目湾を一望できるところである。この丘陵の西方約700mには、熊野九十九王子の一つ切部（目）王子社が、北西約400mのところには、中世末の城址八千貫城が存在するなど歴史的にみてもこの切目川筋において一中心地となっているところである。その丘陵地北側の一角を占める本遺跡は、一部の宅地を除きその大半が畠地となっており、その畠地に主として須恵器及び土師質土器片が広く散布、中には青磁片も見出すことができる。

### 2. 調査（図第四参照）

調査地区は、大きく2ヶ所にわかれるが、（図版三参照）、便宜上A・B・C・Dの4地区に細分しそれぞれ試掘場を設定した。試掘場は原則として2m×2mを考え、状況に応じて拡張してゆくことにした。

A地区は、対象面積が約140m<sup>2</sup>で北方より延びる支丘陵の末端に位置しており表面には須恵器片および瓦器等が散布、調査は、現行鉄道に沿って、3ヶ所の試掘場を設けたが、現状開墾畠になってしまっており、表土をめくるとすぐに地山で遺構は確認出来なかつた。すでに開墾時において丘陵上を削

平し斜面へ畑を造成したと考えられる。

B地区は、A地区とは約130mはなれており南東に位置する別の丘陵である。現状は、畑地でこも鉄道路線に沿って12ヶ所の試掘坑を設け調査したがやはり、丘陵上を削平して畑地を斜面地にまで造成しており耕土を除くとすぐに地山に到達、なかに一部石組が一直線に延びるところを検出したが、石の下から近代と思われる遺物が出土、やはりこの地区も遺物の散布は認められるが遺構は検出しえなかった。

C地区は、B地区の東南斜面地に位置し、現状は、斜面地を造成し畑地としている。ここは、当初遺物の散布が認められず調査の対象外であったが、D地区（東南に隣接）において遺構が検出できたので急拠試掘場を設定調査した地である。しかし、少數の土器片を出土したのみでD地区からの遺構の連続は検出できなかった。試掘場は10ヶ所を設定した。

D地区は、調査地区約360m<sup>2</sup>で16ヶ所の試掘場を設定調査を行ったが、溝状遺構2その他ピット等を検出したので、あらためて、D地区全面発掘調査を実施した。調査は、確認調査時に2m方眼に割り付けてあったのでその地区設定をもとに遺構の確認を行った。その結果（図版第四）溝状遺構2条・大小ピット88ヶ所等が検出され、出土遺物は、土師器・須恵器・瓦器・土師質土器・青磁・中近世陶器等であった。この地区は開墾畑が二段にわかれ、その上段（約160m<sup>2</sup>）に遺構の大半が確認され下段（約90m<sup>2</sup>）においては、大ピット2穴・小ピット3穴を検出した。前記のようにこの地区は、斜面地であり斜面上方を削平し下方へ土を流し整地したものと考えられ、それゆえ各遺構も浅く中には、削平され消滅したものもあると察せられる。

溝状遺構1（SD-1）は近世の磁器片を底付近より出土する溝であるが、溝2（SD-2）へ流れ込んでおり、その流れ落ちる場所（SD-II内）に長さ1.5m以上×巾0.9m深さ約0.5mの矩形の掘り込みが設けられておりその中に0.1~0.3m大的の石がほりこまれた状態でつまっていた。これは、流れてきた土砂をここで留める施設であろうと考えられる。他のピット群については、明確に対応するものはなく不詳としなければならないが、P-1・2については、どちらも一辺約0.9mを計る隅丸方形のピットでP-1は深さ0.5mでその底に小さな凹みをもつ。P-2は深さ0.2mで底中央に径0.3m深さ0.5mの掘り込みをもつ。両ピットの遺物は、瓦器および土師質土器片で近世以降の遺物は混入していなかった。

#### 4. まとめ

このように、丘陵上に広がる西の地遺跡の確認調査を4地点にわたって実施したが、このうちD地区に関して前記の遺構を確認した。しかし、遺構は主として中・近世にわたるものと解することができるが、遺物に関してはさらに古く土師器・須恵器も出土しておりこの地にそれらの遺構が存在することを示唆している。遺構は近世の溝と中世のピット群を得たのみで明瞭に建物等の痕跡を知ることはできなかったが、おそらくこの調査地点は西の地遺跡の一端にあたるものと考えられ近くに古代から中近世にかけての集落遺構が広く存在するものと思われる。

# 出 土 遺 物 観 察 表

## 1 須 恵 器

	口 縁 部	体 部	底 部	色 調	質	備 考
1	端部は丸くおきめている	口縁部と天井部の境界は鋭い 稜がつく		灰 色	3mm大の小粒の石が混入	ビット出土
2	端部は下方に短く屈折	天井部においてヘラ削りを施す		青灰色	粒子の細かい石混入	ロクロは右回転 ビット出土
3	斜め下方に屈折	横ナデ調整		青灰色	1mmの小粒の石混入	ビット出土
4		天井部内外面ともにナデ調整				整地層出土
5	端部は下方へ折り上げる	天井部丸くおきめて調整はナ デしている		青灰色		擾乱部出土
6	端部は下方に短かく屈折し、 やや外反する			内面 … 青灰褐色 外面 … 黄緑褐色(釉)	粗器を思わせる胎土	天井部において重ね焼きの痕 せき 整地層出土
7	端部は下方に曲げている			灰褐色		整形は粗雑 整地層出土
9	若干肥大	天井部は平坦で肩を張った様 に口縁端に向って降下してい			焼成あまり	整地層出土
10	天井部から斜下方に屈折して いる				表面に少量の自然釉	+
11	丸くおきめる				焼成は堅固	タ
12		張り付けた高台をもつ	内面 … 淡青灰色 外面 … 青灰色	胎土は良好であるが整形は粗 雑		擾乱部出土
13		ナデ調整		青灰色		整形はすこぶる粗雑 整地部出土
14		内外面ともに横ナデ調整	比較的厚い純重な感じ		胎土良好、ちみつな感じ	整地層出土
15	外寄した首部に端部はやや重 れぎみにつくっている			青灰色	焼成けんち	SD-2出土
16			2.3 cmの穴を中央部にあける 外面には一条の沈線をめぐら す	青灰色	石粒が多く、焼成は湿度が上 っておらずやわらかい	整地層出土
17	丸くおきめる	横ナデ調整	高台は張り付け	灰 色	1mm大の小粒の石混入し、整 形も純重な感じ	焼成は良好とは言えず、土の しまりが悪い 整地層出土
18			やや外に張った高台をもつ	内面 … 灰白色 外面 … 淡青灰色	成形は粗雑	地山直上

## 2 土師質土器

	口 緑 部	体 部	底 部	色 調	質	備 考
19	平坦につくる	口緑端より2.3cm下に一条の突帯		淡赤褐色	砂粒を含む	内面にススの付着 整地層出土
20	丸くおきめる	口緑端より2.4cmに一条の突帯 ススは突帯を含めた下部		赤褐色	砂粒を含む	外面スス 整地層出土
21	丸くおさめる	突帯以下にススの付着			砂粒が混る。焼成は堅ち	擾乱部出土
22	丸くつくる	口緑端より2.3cm下方に一条の突帯 これより下方にはススの付着		茶褐色	砂粒を含む	*
23	やや丸くおさめる	内外面ともに横ナデ調整 突帯部及び外面にススの付着		茶褐色	焼成は堅固	*
24	やや内寄しながら立上り端部 は平坦に仕上げる	内面にススの付着				内面スス 整地層出土
25	丸くおきめる	外面、突帯の下方からタタキ をほどこす		褐色	胎土砂粒混入 焼成は堅固	ススの付着なし 整地層出土
26	端部は平坦につくるがナデ調 整時ににおいて若干の段をつく る	口緑端より2.2cm下方に一条 の突帯、それより下方にスス の付着		茶褐色	砂粒を含む	整地層出土
27	平坦におさめる			褐色	砂粒の混入	
28	端部平坦におさめる	外面全体にススの付着 横ナ デとタタキで仕上げる		茶褐色	砂質 焼成は堅固	擾乱部出土
29	端部平坦におさめる	突帯以下にススの付着		茶褐色	砂粒の混入	
30	平坦に仕上げる	ナデ調整 口緑部直下1.7cm に一条の突帯、内面は口緑端 にまで及ぶススの付着がある		淡赤褐色	砂粒質	整地層出土
31	平坦につくる			明茶褐色	砂粒多い	ススなし 地山直上
32	端部は平坦に仕上げる。やや 内寄する	口緑端下に一条の突帯を設ける 突帯よりやや下部にタタ キをほどこす		茶褐色	胎土砂粒を含み良好	ススの付着は内面? 擾乱部出土
33	端部は平坦に仕上げる やや 内寄する	一条の突帯が口緑端より1.7 cm下方にめぐる。内面にも若 干のスス(突帯下方にもスス )の付着		淡赤褐色	砂粒を含む	整地層出土
34	内寄する口緑部の端部は平坦 につくる	タタキを施す			砂質で紫母片・長石膏の混入 がある 成形は粗雑であるが 全体にシャープさがある	内面にススの付着 地山直上

35	丸くおさめる	口縁端より 2.1cm 下方に一条の突唇あり それより下方はスヌの付着がある		暗茶褐色	焼成も堅緻	整地層出土
36	横へ直角に張り出す	外面にスヌの付着				外面スヌ付着 地山直上
37	丸くおさめる	横ナデ調整	平底で腰部から口縁部にかけて内寄しながら立上る	淡茶褐色	土師質土器にしては良好な粘土 若干の砂粒を含む	整地層出土
38	「くの字」状に外反して口縁は端部において上方に若干つまみあげている			内面…口縁端より 1.4cm のところ暗茶褐色を呈す 全面的には赤褐色をしている	径 1mm 大の小粒の石混入	*
39	端部は平坦におさめる	外面全体にスヌの付着 横ナデとタタキで仕上げる		茶褐色	砂質 焼成堅緻	擾乱部出土
40	内面白縁にそってへらみがきを施す 端部は若干の凹みを有しているが平坦につくる	ハケで整形したあと、横ナデ調整		内外面ともに黒色 断面は茶褐色を呈す	成形は丁寧である	整地層出土

の

### 3 陶 器

	口 縁 部	体 部	底 部	色 調	質	備 考
41	上方に折り曲げる	「くの字」状に折れる。部分下方に重ね重きの痕せきあり		内面 … 淡赤茶褐色(部分的) 外面 … 淡黒茶褐色(部分的)		SD-2 出土
42	直上に粘土を折り曲げている					整地層出土
43	内寄する口縁の端部は平坦につくられる	タタキを施す			砂質で薄母片・長石片の混入がある。成形は粗雑であるが全体にはシャープさがある	内面にスヌの付着 地山直上
44		肩部において、直線波状文を施す		暗茶褐色		擾乱部出土
45	玉縁の口縁をもつが、力強さにとぼしく室町末期の玉縁口縁か	口縁部と肩部の間ににおいて粘土の巻きが残っている		暗茶褐色		整形は丁寧だが力強さに欠ける 摻乱部出土
46		底部は張り付け、多少の化粧枯土を張りつけている		暗茶褐色	胎土は粗く整形も難	擾乱部出土
47	純重な感じの口縁をもつが端部は外へ折り上げている			暗茶褐色	径 1mm 大の小粒の石の混入が目立つが焼成は良くしまった土器である	整地層出土

## 4 磁 器

	口縁部	体 部	底 部	色 調	質	備 考
48		丸くおさめる	比較的高い高台をつける	乳白色の釉がかかる		擾乱部出土
49			高台の裏をのぞいて全体に濃緑色の釉がかかっている			緑釉の厚さ0.5~0.9mm 擾乱部出土
50			部厚い底に削り出た高台が付いている	素地は白色であるが釉は淡緑色を呈している		
51		ゆるやかに内彎しながら立上る	削り出しの高台をもち端部においては丸く仕上げる。	素地は灰色を帯び、釉は淡緑色を呈す	釉は気泡を含んでいる	釉は細かいひびわれを生じている 摻乱部出土
52	粘土を外側へ折り曲げ玉縁の口縁をつくる	肩部に灰釉(自然)がふりかかっている		暗茶褐色	胎土・整形はともに粗雑	*

## 5 土師質土器

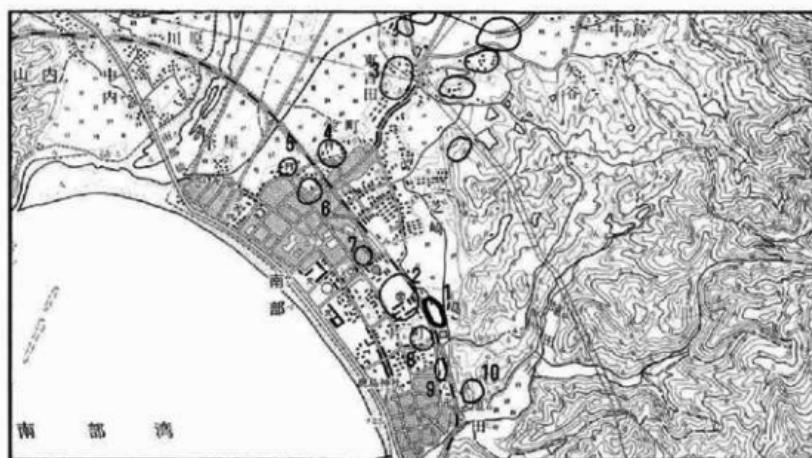
	口縁部	体 部	底 部	色 調	質	備 考
54	平坦につくる一対の耳(取っ手)がつけられ耳には孔がうがたれているが、1孔か2孔かは不明	やや内彎ぎみの短い体部は外面においてスヌの付着がみられる	ゆるやかなカーブをえがく平坦か	赤褐色	小粒の石が混入、整形はていねいで焼成も良好	整地層出土

図版一 位置図



位置図 (1:25000)

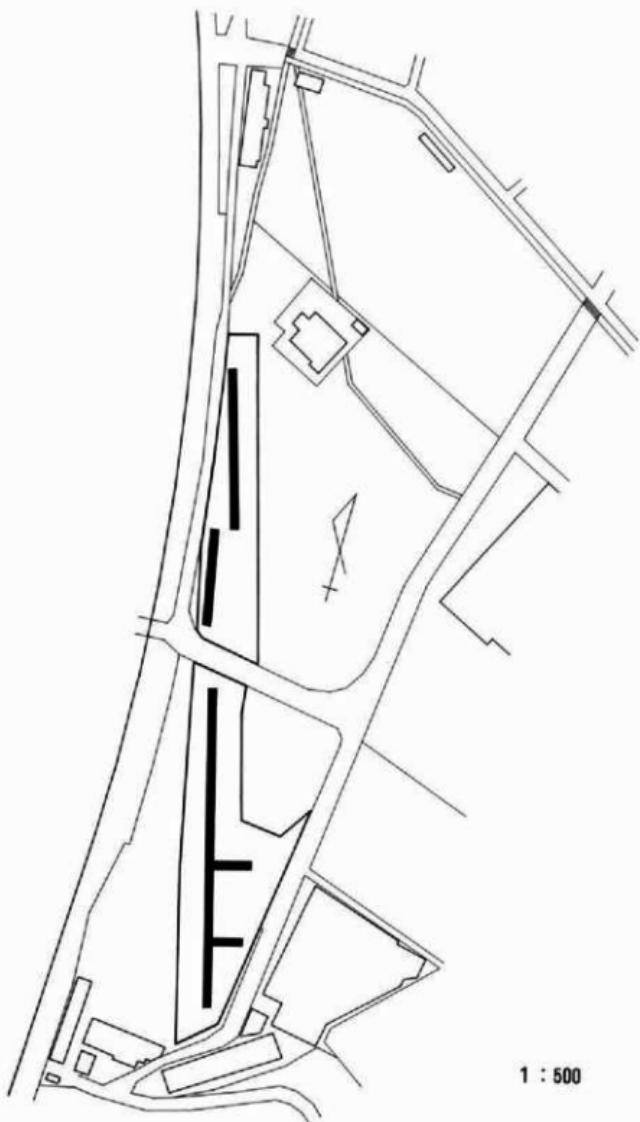
- |            |          |          |          |
|------------|----------|----------|----------|
| 1. 西の地遺跡   | 2. 切目王子社 | 3. 八千貴城跡 | 4. 元村 遺跡 |
| 5. 西の地古墳群  | 6. 小池谷遺跡 | 7. 田の口窯跡 | 8. 松の前遺跡 |
| 9. 井上 I 遺跡 | 10. 丸山遺跡 |          |          |



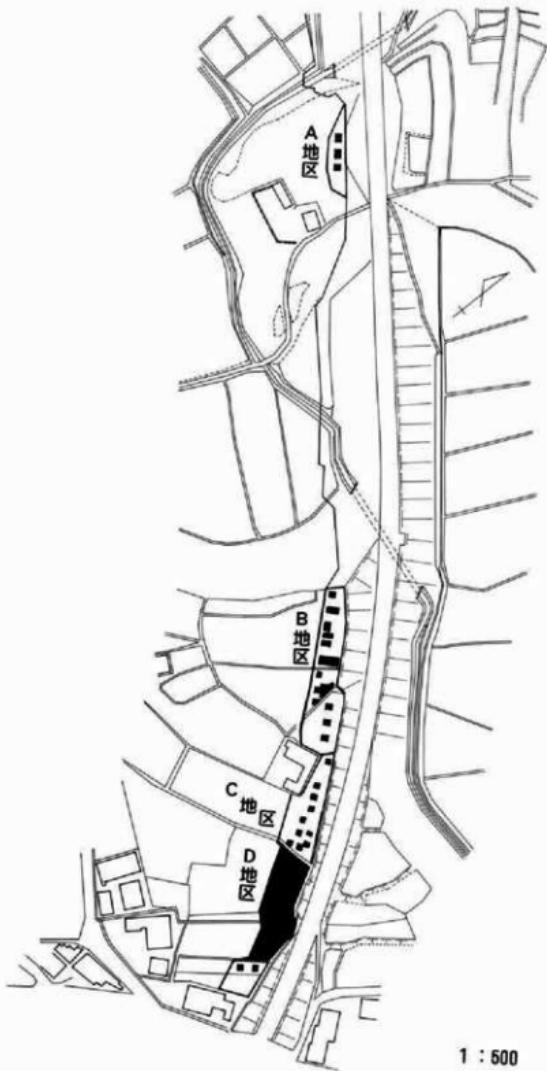
位置図 (1:25000)

- |          |             |         |         |
|----------|-------------|---------|---------|
| 1. 調査地点  | 2. 南部高校々庭遺跡 | 3. 大塚遺跡 | 4. 芝古墳群 |
| 5. 三鍋王子社 | 6. 高見遺跡     | 7. 片町遺跡 | 8. 片山遺跡 |
| 9. 塙田遺跡  | 10. 塙田古墳群   |         |         |

図版二 南部高校々庭隣接地調査地区

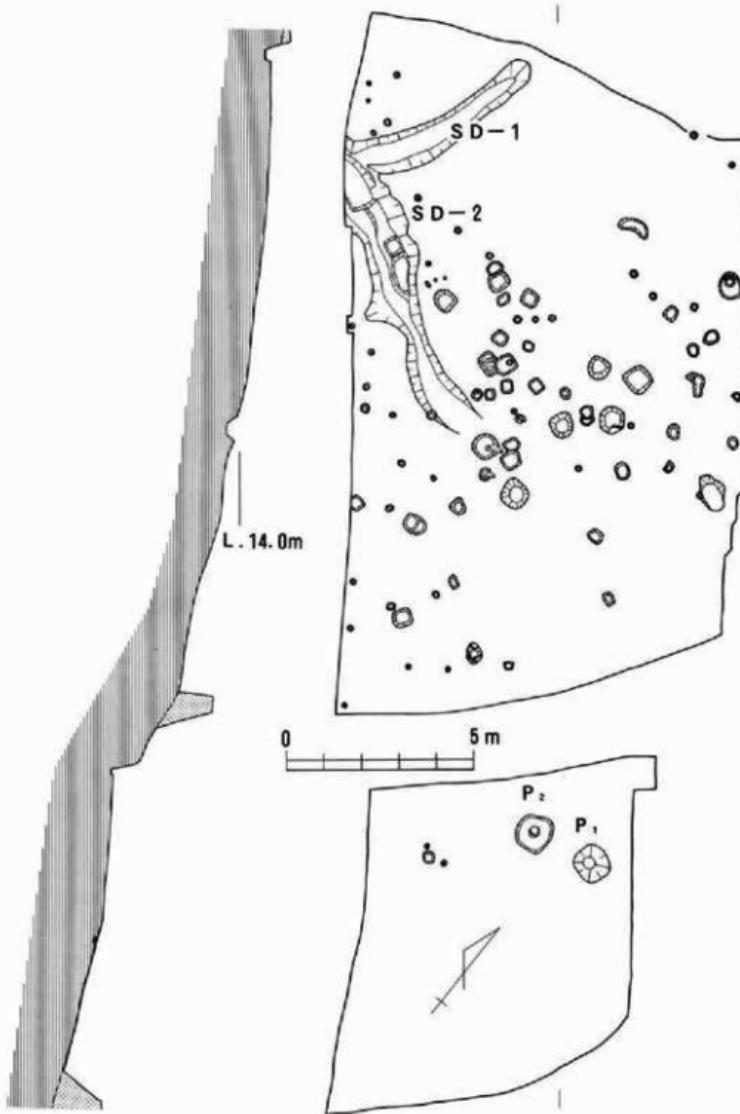


図版三 西の地遺跡調査地区

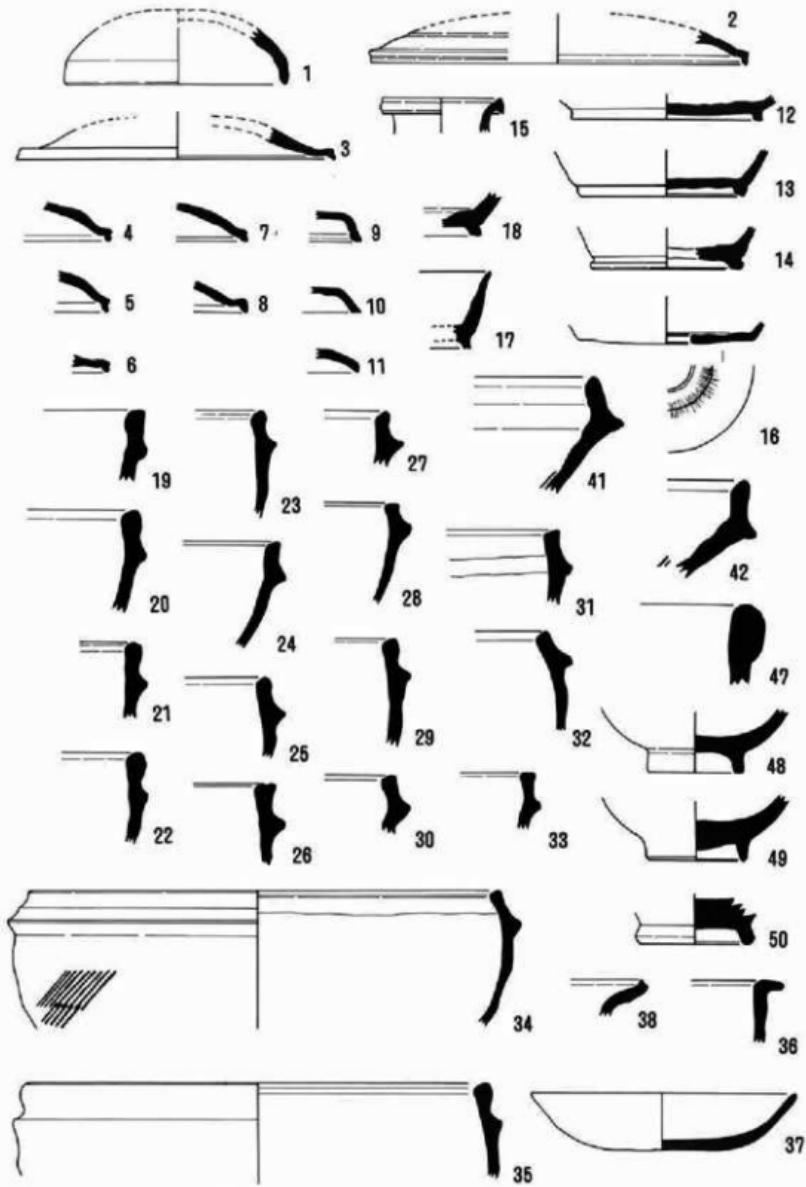


1 : 500

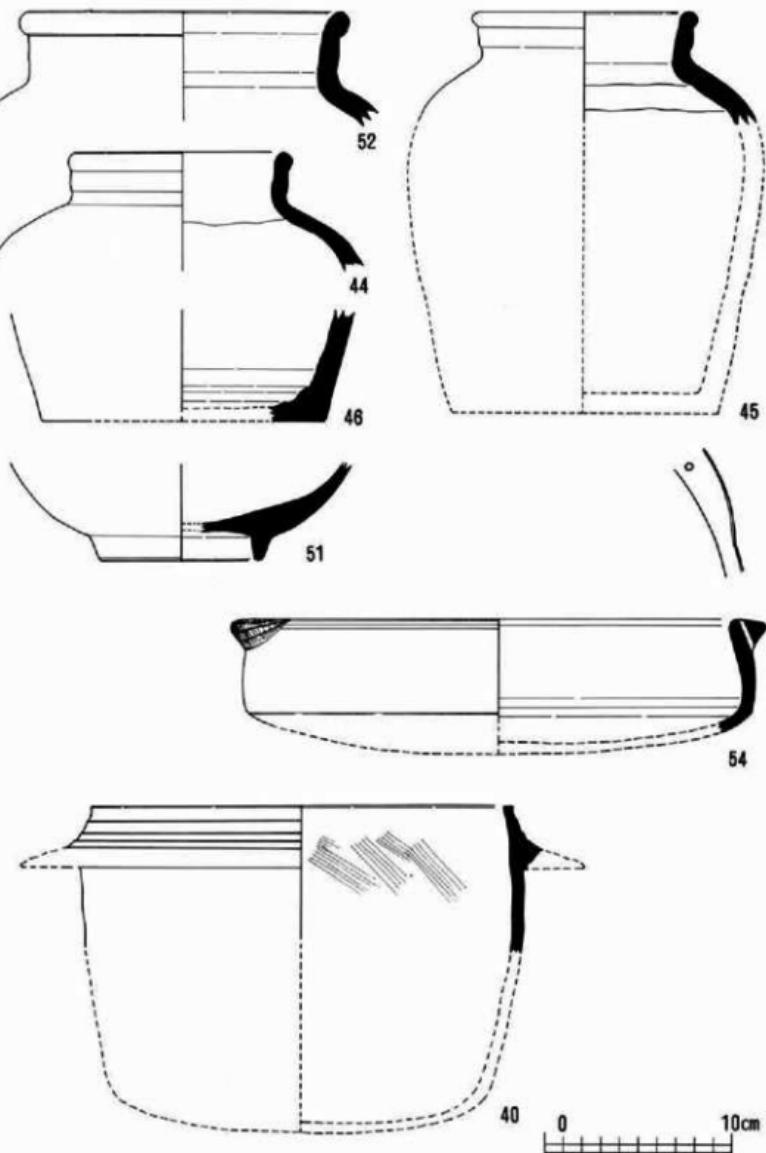
図版四 西の地D地区遺構図



図版五  
西の地D地区遺物実測図



図版六



図版七 遺跡遠景・トレンチ



1. 南部高校々庭遺跡遠景



2. トレンチ発掘状況

図版八 トレンチ断面・トレンチ



1. トレンチ断面土層



2. トレンチ風景

図版九 トレンチ断面・西の地遺跡遠景



1. 南部高校々庭遺跡隣接地トレンチ断面土層



2. 西の地遺跡遠景

図版十 西の地C・D地区



1. C地区 試掘塗



2. D地区 遺構状況

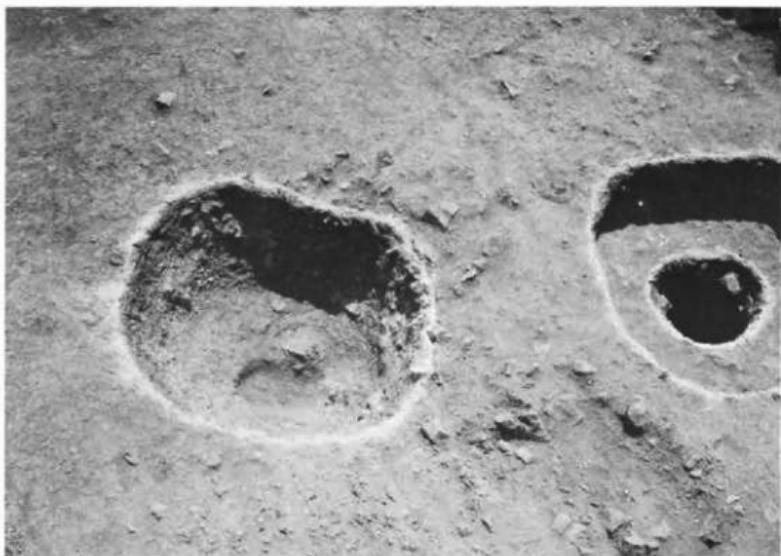


1. D 地区 遺構状況

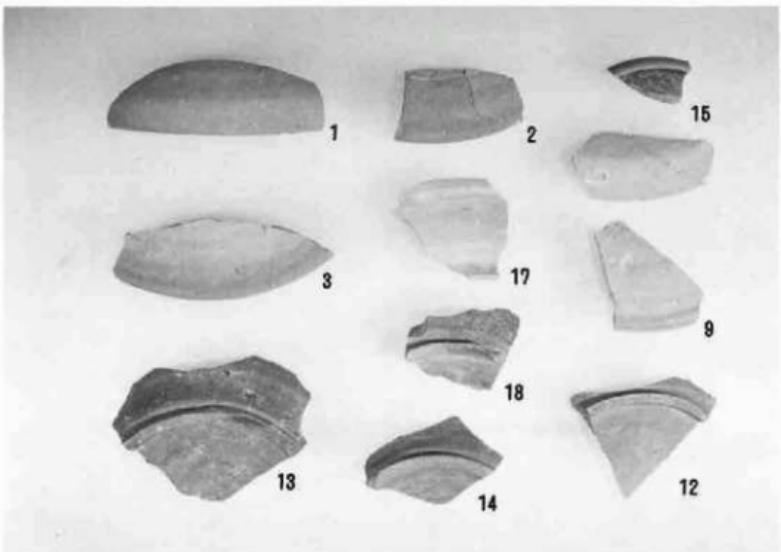


2. D 地区 遺構状況

図版十二 D地区・遺物

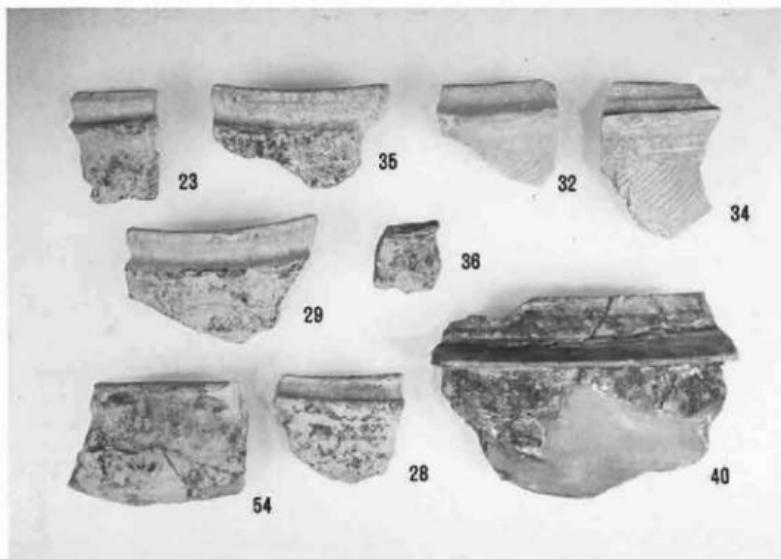


1. D地区ピット1・2

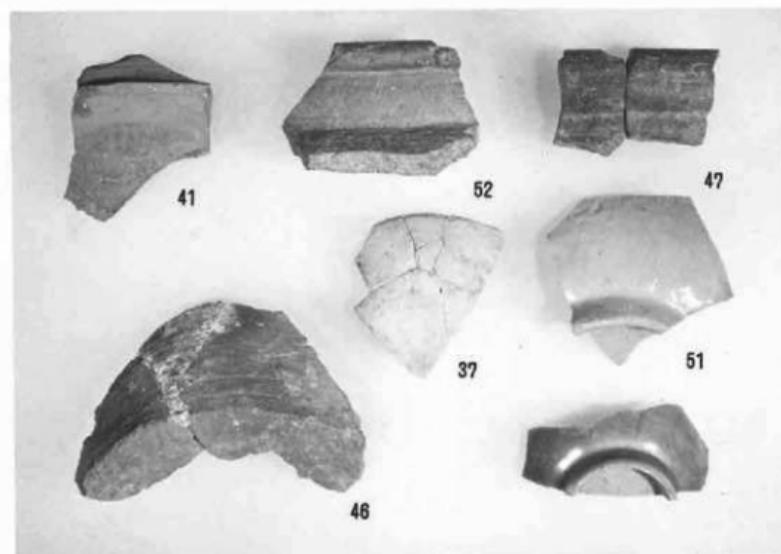


2. D地区出土遺物

図版十三 遺物



1. D 地区出土遺物



2. D 地区出土遺物

国鉄紀勢本線々増工事関連  
埋蔵文化財発掘調査概報

昭和51年3月31日

発行 和歌山県教育委員会

社团法人 和歌山県文化財研究会

印 刷 邦 上 印 刷